

個々人の集中力がチームの集団凝集性に与える影響 - ベースボール型の競技に着目して -

発表者 高崎 誉大
指導教員 加藤 敏弘

キーワード：集中力、集団凝集性、影響、個々人、チーム

1. 研究の動機と目的

人は何かの作業や動作に没頭すると、集中力という目に見えない力を発揮するときがある。集中力自体は目に見えないものの、集中力が発揮されている状態は顔つきや雰囲気にも表れることがあり、人はそれを感じ取ることができる。

筆者が野球をプレーしている時、他のプレーヤーが集中している様子から何かを感じ取り、自分の中で気づき、刺激され、具体的な行動の変化が起こる事があった。このように、個々人の集中力によって人と人が相互に影響しあうことがある。それだけではなく、一人ひとりが集中できているときの練習や試合は、チーム全体がよくまとまり、一体感が生まれる。なぜ個々人の集まりであるチームが、あたかも一つになっているように感じるのか。

そこで本研究では、ベースボール型の競技（野球、ソフトボール）に着目し、チーム内の個々人の集中力がどのように表れ、チームメイトはそれをどのように感じ取るのか、それがチームの集団凝集性にどのような影響を及ぼすかについて明らかにし、チーム作りのための一助としたい。

2. 研究方法

2-1 研究対象

I 大学硬式野球部、同大学準硬式野球部、同大学軟式野球部、同大学男子ソフトボール部、同大学女子ソフトボール部の5チームを対象とした。5チームにアンケートを配布し、その後のインタビュー調査は各チーム1~2人を対象とした。

2-2 調査方法

対象チームにアンケートを配布、回収し、集計を行った。そして対象チームからインタビュー対象者の抽出し、インタビュー調査を行った。得られたデータを基にして、佐藤⁴⁾の手法に則り質的研究を行った。

アンケートの質問内容は、競技名、学年、ポジション、役職や係の有無などのフェイスシート、競技に対する意欲を測定する競技意欲測定尺度、集中力とチームのまとまりに関する記述式の質問と集団凝集性尺度である。

2-2-1 集団凝集性尺度とは

阿江(1986)が開発した集団の凝集性を評価する尺度を用いた。これにより、被験者がどのように集団の凝集性を感じているかを測定することができ、違った立ち位置のインタビュー対象者を抽出することができる。

2-2-2 競技意欲測定尺度とは

TSMI (Taikyo Sports Motivation Inventory: 体協競技意欲検査) を改良して、輕易に測定できる競技意欲心理測定を作成した金井(2002)の尺度を採用し、その尺度の中から競技意欲を測定する

「努力志向性」という項目を抜粋して用いた。競技意欲は、森²⁾が著書の中で意欲と集中力の関係性について記述しており、意欲は集中力と密接な関係があるとしたことから、意欲に関する尺度を用いた。

3. 集中力をどのように感じ取るか

3-1 どのように「集中している」と感じ取るか

【自己への集中】【行動の表れ】【雰囲気の違い】【表情の違い】【はっきりわからない】【周囲への注意】【良い結果】

3-2 どのように「集中していない」と感じ取るか

【ネガティブな発言】【行動】【表情】【プレー】【ミス】【わからない】

4. 集中力を感じてどのように行動や心情に変化を及ぼすか

4-1 「集中している」と感じてどのように行動や心情に変化を及ぼすか

【気持ちの変化】【チームへの影響】【変化なし】【緊張】【雰囲気の変化】【配慮】【行動の変化】【感心】

4-2 「集中していない」と感じてどのように行動や心情に変化を及ぼすか

【集中する】【気持ちの変化】【変化なし】【つられる】【チーム全体への影響】【集中させようとする行動】

5. どのような事が原因でチームの集団凝集性に影響が及ぶか

5-1 どのような事が原因でチームがまとまるか

【目標意識】【時期】【部員】【競技への思考】【結果】【行動】【環境】【理解不能】

5-2 どのような事が原因でチームがまとまらないか

【時期】【部員】【目標】【練習】【結果】【理解不能】

6. 個々人の集中力がチームの集団凝集性に及ぼす影響の具体例

6-1 Eの例

◎ピッチャーによるピッチングが、チームの雰囲気に影響を及ぼす

野球やソフトボールは、ピッチャーがピッチングを行って初めて他の野手のプレーが起こる。コントロールが悪いとストライクが入らず、また打たせないと野手もプレーを起こせない。野手が長い時間プレーを起こさないと「テンポの悪さ」として捉え始める。テンポの悪い状況が続くと、野手はプレーに参加できず、なおかつチームはピンチに陥る。しかしピッチャーの調子が悪いために、さらにチーム全体の「試合の状況」が悪化してしまう。これらのことから、Eがインタビュー調査で述べたように「チームがしらけてしまう」こと

につながる。

逆にピッチャーの調子が良く、ストライクが多く入るときは非常にテンポが良い。ストライクの球ならばバッターは打ち、飛んできたボールに対して野手はプレーを起す。もしバッターが見逃すことをしても、ストライクが入っていれば「三振」となり、アウトカウントが増えチームは有利になる。

以上のことから、ピッチャーによるピッチングの調子の良し悪しはチームの集団凝集性と関係していることがわかる。

6-2 Gの例

◎勝ちにこだわる姿勢

Gが所属するチームでの試合で、ある選手がチームを勝利に導くために、自分勝手なバッティングではなく、戦略に沿ったチームのためのバッティング(流し打ちなど)をしている様子が「勝ちにこだわる姿勢」として感じ取られていた。「どのように集中力を感じるか」に関するアンケート調査では、「最後まで諦めずにボールを追う」「視線がボールに集中している」など、姿勢に関する回答が得られている。その勝ちにこだわる姿勢から、Gはチーム全体に一体感を感じていた。

他の例として、Gの所属するチームに自身の感情をすぐ表に出す選手がいる。チームメイトがエラーをすると、励ますのではなくイライラする態度を見せる。自分がミスをしなくても他のプレーヤーがミスをすることによって、チームはピンチに陥ることから、態度に示してしまう。「どのように『集中していない』と感じるか」に関するアンケート調査では「ふてくされる」「いらいらしている」などの回答が得られている。また、集中力がない様子がプレーにも表れ(キャッチングが雑になる)、その様子を感じたチーム全体の雰囲気が悪くなる。以上のことから、競技への姿勢とチームの集団凝集性は関係がある。

7. 個々人の集中力とチームの集団凝集性に関する事柄

分析結果から、チームの集団凝集性に良い影響を及ぼすと考えられること(+)と、悪い影響を及ぼすと考えられること(-)とに分け、箇条書きで記述する。

①チーム全体の共通の行動(+)

②やる気の感じられない行動(-)

③チーム全体の共通の意識(+)

(各々の役割を意識すること、自分で決めた課題を徹底すること、チームの目標設定)

④部員同士での意識の違い(-)

⑤部員同士の人間関係 (+) (-)

(部員のチームに対する姿勢や態度、チーム内の雰囲気)

8. 個々人の集中力がチームの集団凝集性に及ぼす影響

個々人の集中力は、チームの集団凝集性に影響を及ぼすことが明らかになった。チームの集団凝集性に影響があるとわかった項目は大きく分けて3つあり、①部員の行動、②部員の意識、③部員同

士の人間関係であった。

①部員の行動

本研究で明らかになったことは「『チーム全体の共通の行動』が凝集性に大きく影響を与える」ということである。代表例として、「声を出す」行動が挙げられる。インタビュー調査で、「一人で行うより大人数で同じ行動をとると、よりまとまりを感じる」という発言も得られていることから、全体の共通の行動が集団凝集性に影響を与えていると考えられる。

②部員の意識

部員の意識については、2つに分けて考察をする。

(1)チームの目標を意識すること

チームの目標はチーム内の一人ひとりが等しく共有すべきものである。チーム内の個々人で「チームの目標への意識」にずれがあると、「何のために」競技を行うのかが明確にならなくなる。チームの目標を達成するということをしっかりと意識できているか、意識が薄れているかによって、練習に取り組む姿勢となって表れる。

(2)チームでの役割を意識すること

「主将」「副主将」「守備要員」「代打要員」など役割によって、「チームを構成する一員である」という意識が生まれる。その意識によって何のために行動するかが明確になり、意欲として表れる。

③部員同士の人間関係

人間関係は、「チームの雰囲気」と密接に関わっており、チームの集団凝集性に影響を及ぼす。また、集中力を発揮している選手がいることによって雰囲気が良くなるというデータも得られている。こうした選手の存在がチームの集団凝集性に影響する。

9. 今後の課題

今後の課題として、目標設定とチームの集団凝集性の関連について調べるのが考えられる。なぜその競技を行っているのか、個人ではどのような目標を立て、またチームではどのような目標を立てているのか等、様々な観点から目標設定を調査し、それによってチームの集団凝集性にどのような影響を及ぼすかを調査することで、本研究をより深く掘り下げることができるだろう。

10. 引用・参考文献

1) 渡邊 融, 他著(1984):「現代体育・スポーツ大系 第23巻 野球・ソフトボール・ゴルフ・クリケット」, 講談社 p12~21, p143, p148, p149, p163~168

2) 森 敏昭著(1997):「集中力をつける」, 日本経済新聞社 p11~15

3) デズモンド・モリス著 藤田統訳(1980):「マンウォッチング~人間の行動学~」, 小学館

4) 佐藤 郁哉著(2008):「質的データ分析法 原理・方法・実践」, 新曜社(株)

5) S・B・メリアム著 堀薫夫、久保真人、成島美弥訳(2004):「質的調査法入門 - 教育における調査法とケース・スタディ -」, ミネルヴァ書房